

藩窯の誇り

茶陶の品格

上野焼の特徴はまず茶陶であること。さらにいえば、当初から藩主が使うための器を作り続けてきた「御用窯」としての伝統を誇ることが挙げられます。かつて織田

信長は「茶の湯」を政治に取り入れられました。当時、茶会への出席は権威の証しとされ、名物茶器は一国に値したといわれています。その茶の湯を「侘び茶」として大成したのが千利休です。上野焼を開窯させた細川忠興は、信長に仕え、利休に学んだ超一流の大

御用窯の格調と品質の高さ：上野の本質を知る人は少ない。作り手の数だけ趣があり、一つとして同じ器は存在しない。絶え間なく理想を追求した伝統の上に、今の上野がある。

「侘び寂び」に「綺麗」を加え、潔さと美しさが同居する上野の作風。右は江戸初期、釜ノ口窯で作られた古上野「葉灰釉茶碗」。左は江戸後期、皿山本窯で作られた「三彩馬盃茶碗」。いずれも「上野焼展図録」より抜粋（個人蔵）。



「手取りの感触も口当たりも素晴らしい」と文化祭会場で絶賛された上野焼。手から離れたくなくなる魅力がある。



裏千家辻村社中 辻村宗栄（宗栄）さん

名茶人。忠興の嗜好が原点にある強さが、上野焼の格調の根底にあります。そんな上野焼が一番似合う場所が茶席です。11月2日に開かれた町民文化祭でお点前を披露した辻村宗栄さん（赤池）は「目立ちすぎず、それでいて存在感があるのが上野焼。茶席と見事に調和する力があり、他産地のやきものとの相性も申し分ありません」と、空間に溶け込みつつ、場の景色や雰囲気をも変える上野焼の魅力を説明します。細川忠興が求めた「侘び寂び」に通じる真つすぐな趣。その礎に時代を経て加味された美しさが、国焼茶陶、藩窯として歩んできた上野焼の風格に表れています。



時代と歩んだ作風

上野焼のもう一つの特徴は、多彩であること。多種の釉薬が使われ、それぞれに肌合いや艶が違います。その作風は時代によって趣を変え、格調の高さを残しながら現在に至っています。

戦乱の世から間もない初期の作品には、研ぎ澄まされた野趣あふれる風格が漂っています。江戸後期には、上野の代名詞となっていた銅を含んだ緑青をはじめ、三彩や紫蘇手などの装飾性も高まり、作品を特徴づけました。時代と向き合い、試行錯誤を重ね、絶え間なく陶技の幅を広げてきた上野焼。4百年をこえる伝統と洗練された現代感覚の調和、手間ひまを惜しまず妥協を許さない姿勢が、ひとつの器を生み出しています。

上野の多彩な色、肌、技。

鉄釉 灰釉に鉄を混ぜた釉薬。一般的に深い茶褐色。	灰釉 草木の灰に長石などを配合した基本的な釉薬。	葉灰釉 透明な灰釉に葉灰を混ぜた白濁の美しい釉薬。	緑青 上野の代表色となっている酸化銅を使った釉薬。
粉引 素地の上に白い土を化粧掛けする李朝の技法。	伊羅保 見た目も手触りも荒々しさが特徴の伝統的釉薬。	朝鮮唐津 唐津焼で有名だが、古上野にもみられる釉薬。	鉛釉 鉄釉の一種、酸化焼成で透明感のある鉛色に。
三彩 三種の釉薬で彩られる後期上野の代表技法。	鉄絵 鉄分を含む絵の具で下絵を描く、伝統的な技法。	刷毛目 黒い素地に白い化粧土を刷毛で塗る李朝技法。	三島手 素地に文様を擦り、化粧土を塗り込む李朝技法。
木目 二色の土を使って成形し木目文様を出す技法。	紫蘇手 鉄釉の低火度焼成による窯変で紫蘇色の肌。	玉子手 透明感のある薄黄色で潤いのある釉肌の特徴。	一陳掛 長石釉や化粧土を絞り出すように流し掛ける技法。
虫喰釉 素地が表れる虫喰、粒が美しく均一に連なる。	紫蘇手 高麗茶碗や西日本の古窯にもみられる淡い色調。	柚肌 柚子の皮のような質感になる鉄釉の低火度窯変。	

上野焼は価格が高い。66%

上野焼秋の窯開き来場者100人に聞きました。

釜ノ口窯跡 (福智町上野)

1602年に開窯した上野焼当初の窯。41mにおよぶ連房式登窯の跡がある。純真さと力強さを備えた格調高い作風が特徴。



←長大な登窯跡が明らかになった昭和29年の発掘調査

菜園場窯跡 (北九州市小倉北区)

小倉城下にある全長16.6mの菜園場窯跡。細川忠利の藩主時代に操業したと考えられている。藩主の「お楽しみ窯」的な存在。



←県文化財に指定された窯跡

岩屋高麗窯跡 (福智町弁城)

開窯後から藩主・細川氏が肥後に移るまでの間に操業した窯跡。自由奔放かつ、民需的要素の強い作風が特徴とされている。



←高取焼系陶工も携わった窯

皿山本窯跡 (福智町上野)

主に小笠原藩時代に操業した窯で、多種多様な技法や釉薬が特徴。上野焼で最長期間、240年以上にわたって活躍した窯。



←藩窯の使命を全うした窯

※ 茶碗4点「上野焼展図録」より抜粋（個人蔵）

